

豆句集



その二粒目
2013 年立夏号

目次

*俳句

飛び立つ 梅津志保 …2

別の空— another sky 井上雪子 …5

野はじまる 西村 遼 …8

*俳句鑑賞

三人で六句 …12

梅津志保 …13

井上雪子 …14

西村 遼 …15

*短歌+俳句

春の家 吉野裕之+浦崎真子 …16

豆句集

豆句集 みつまめ
2013年立夏号 (通巻第2号)



みつ
まめ

飛び立つ
梅津志保

都鳥みなどみらいに背を向けて

寒鯉の静かなる尾や泥混ぜる

鉄橋を渡るたび濃く春の宵

黒猫のひと爪深く白木蓮

また歩く斜めのからだ春一番

春泥のくぼみは浅き仔牛かな

夕暮れに飛び立つかたちシクラメン

葉脈のくつきり浮かぶ春ひなた

春の雨膨らんでいる若芽かな

鳥過ぎてしずかに割れる花筏

雨降れば紅き円なり落椿
ゆらゆらとちいさき風に青柳
空きビルに囀り響く夕暮れか
花林檎呼ばれては犬振り返り
新しき街に漕ぎ出すブランコや

別の空—another sky
井上雪子

独活うすしせりせり淡き音を食む
父はゐるいつかどこかの夕霞
理髪師に呼ばれ世界は三月に
櫂なり全速力で春一夜

遅桜アウトサイダーだらけなり

八重桜ひとりの見てゐる別anotherの空sky

躑躅咲く蝶のゆくへはもう追はず

万緑やずうつと煙草を吸つてゐた

憲法の日のカーラジオから君の歌

必要とされぬ社会の鯉のぼり

初蟬の胸の空洞なにか満つ

湾はみな海抱くかたち沖縄忌

浮いて来いことばがほのかに夜は波

織り糸を贈ると決めてレモネード

夏野行くGoogle Earthの眼を閉ぢて

野はじまる

西村 遼

破れ蓮トーキョー終わり野はじまる

冬日和ボートに考えなしに乗る

8 マン冬の帽子が似合いおり

寒卵つぎつぎ嵌めて晴れ間かな

冬銀河連れ込み宿に連れ込みぬ

鳥雲に入りて大連から電話

凧いでいる此処は冷たき春の沖

げんげ野に犬解き放つ無職かな

不可視なり彼方此方の猫の恋

春至る金銀銅貨なげうてば

ルノアール石橋さんの敬語かな
龍天に登りボイラー技士昼寝
高笑い散って水なき川に散る
たとえば春のベンチで大陸の話せむ
点字なぞる指すべらかに東風の中
乳輪の夜の如くに広がれり

春雷や木目の波を見ておれば
春光や螺子切りダイスの大中小
観覧車叱られながら暮春かな
むさしの国へゆく花筵踏みながら
仙人掌と人間の影平行に

俳句鑑賞◎三人で六句—— 梅津志保＋井上雪子＋西村 遼

立冬号から早半年。今回は俳句鑑賞に挑戦してみました。

良い句に出会った時は、出来るだけ良い言葉で誰かに伝えたい。

そのためにまずはこの三人の間で互いの鑑賞を出し合い、響き合わせてみました。

この小さな場所からも、私たちの心を動かした力ある句はまたどこかに届くということ。

この試みの勝算はそれだけです。

あぢさゐの穂の大きな休館日——石田郷子
喉に水まつすぐ落ちて夏の山——小島 健
繪をかいてゐる子の虹の匂ひかな——國弘賢治
どうしていいかわからぬ街を葉桜占む——関 悦史
起床してすぐに踊つて風つくる——阿部完市
首都と呼べる光のうちを十葉は——佐藤文香

あぢさゐの穂の大きな休館日

——石田郷子『木の名前』

この句を読むといつでも、図書館の入り口に立っているような気がする。私にとつて親しみやすい寸景だが、くり返し読むと、はつとする。紫陽花に出会えた喜びの気持ちと、休館日と知って残念な気持ちのふたつの大きさが伝わってくるからだ。静寂に包まれた休館日の建物と雨に打たれるあまたの紫陽花の穂が重なり合い静けさは一層深まる。どんな状況においても、気持ちの持ち方で世界は変わる。そんな大切なことを気づかせてくれる句だ。

〔梅津志保〕

喉に水まつすぐ落ちて夏の山

——小島 健『爽』

夏山に登る。見上げれば青い空、登山道の緑は濃くむせ返るようだ。喉は渴きカラカラだ。休憩を取り、首を伸ばして、水筒の水をごくごく飲む。水は「まつすぐ」喉を通り、自分の体中に落ちていく。ひとつひとつの行為が五感を刺激する。また、夏の山に水（滝）が流れているとも読める。登山をしていて、滝に出会うと、その水しぶきに活力をもらう。夏の山と自分が一体となる心地よさ、充足感、水によって生かされている自然や自分を感じることが出来る句。

〔梅津志保〕

繪をかいてゐる子の虹の匂ひかな

——國弘實治『賢治句集』

絵を描いている子ども、虹の匂い、それきりの深い安心感。虹が出ているのか否か、読んだ人の数だけ情景は存在するが、誰もが深く澄んだ思いを持つ、そんな俳句だ。

ひらがな表記は虹の儂さを優しく受けとめ、「かな」という断定が暗れてゆく空の明るさを思わせる。虹の匂いは「子の」と、ただおおらかに繋がれ、揺れない。過ぎゆく美しさ、届けるべきものは真つ直ぐ言葉にされ、時代を貫通し、強く温かく届き続ける。

〔井上雪子〕

起床してすぐに踊つて風つくる

——阿部完市『にもつは絵馬』

シンプルだが不思議な句だ。ポイントは「すぐに」だろう。目が覚めて、意識や心が動き出す前にまず体が動き、そこから言葉が生まれている。つまり、無意識にはもう詩のようなものがある。阿部完市の俳句を読んでいるとそう感じる。

風は感じるだけでなく作ることもできるように、風景は見るだけでなく自分が風景そのものになることもできる。たとえば踊りはその最たるものの一つだし、多分俳句もそうだろうと思っている。

〔西村 遼〕

どうしていいかわからぬ街を葉桜占む

——関 悦史『六十億本の回転する曲がつた棒』

一昨年の大震災でご自宅に大きな被害を受けた作者の句だ。あえて、「どうしていいかわからぬ」と切つて読む。山頭火を思いだすつぶやき、押し寄せてきた現実を拒むように「わからぬ」「占む」と重ねた断定、一層の苦さが立ち上がり、日本の今が重なる。ここで生きていく覚悟が崩れ落ちそうなものを止める。簡明な一つの表現の同じ光景に異なる貌、関さんの俳句だ、「正解がないように作つただよ」と言うのかもしれない。が、どこからか、今・このリアルが呆然と滲む。

〔井上雪子〕

首都と呼ぶる光のうちを十葉は

——佐藤文香「真昼」（『新撰21』所収）

東京へ向かう高速バスの車内で、この句のことを思い出した。夜の高速道路では、自分が窓外の光や音や振動の一部になつたような気がして、それらを引き寄せ収束させる巨大な存在としての東京というイメージが浮かんだ。

だからこの句の大づかみな把握は、同時にとても精確で実感のこもつたものと感じられる。

巨大な東京に対する十葉は、小さくとも自生する力を持つ優しい姿の花である。その対比に、作者の意思がある。

〔西村 遼〕

春の家

吉野裕之+浦崎真子



フランスコに桜はなびら満ちてゆく時間と思う君の沈黙 [H]
いろいろな人が歩いて来る窓が目の前にある幸福のよう
もうないと教えてくれるメールありしろがね色のその photograph

アネモネやをちこちの窓ひらき初む [M]

尾を撥ねて囀る二羽でありにけり

ふるふると笑ふ手許や蕨餅

象の仔の名前を募る五月かな

遠くまで行ける切符や夏始

「俳句鑑賞」出典一覧

- ・石田郷子『木の名前』（ふらんす堂、2004年）
- ・小島 健『爽』（ふらんす堂、1995年）
- ・國弘賢治『賢治句集』（私家版、1991年）
- ・関 悦史『六十億本の回転する曲がつた棒』（邑書林、2011年）
- ・阿部充市『にもつは絵馬』（牧羊社、1974年）
- ・佐藤文香「真昼」（『新撰21』所収、邑書林、2009年）

豆句集



豆句集 みつめ

井上雪子

梅津志保

西村 遼

Producer * 吉野裕之

Special Thanks * 浦崎真子

このファイルはホームページ配布版のため、
奥付の内容が印刷版のものとは異なります。



豆句集 みつまめ

2013 年立夏号（通巻第 2 号）

2013 年 5 月 5 日発行

発行所

みつまめ工房

<http://homepage3.nifty.com/a-un/mitsumame/>

制作：アトリエ云 印刷：啓文社

定価：300 円（税別）